

「てしまう」による話し手の感情は
どのように解釈されるのか：関連性理論の観点から

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 敏広 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.14945/00028109 |

「てしまう」による話し手の感情は どのように解釈されるのか —関連性理論の観点から—

田 村 敏 広

キーワード：補助動詞「てしまう」、関連性理論、手続きの意味、高次明意、暗意

1. はじめに

日本語の補助動詞「てしまう」(以下、「てしまう」)は、話し手の感情を表出する形式であることが知られている(高橋(1969), 寺村(1984), 杉本(1992, 1992), 藤井(1992), 西川(1996), 鈴木(1998), 田村(2015a, 2015b)など)。次の例では、事態に対する話し手の否定的感情が表出されている。¹

- (1) a. 嗚呼可哀想な事をしてしまった。
b. おやすみ。ごめんよ、つまらないことをいっちゃった。
c. あれじゃ、まるでわたしが悪者になってしまうじゃないか。

(藤井 1992:27-30)

¹ 「てしまう」によって表出される話し手の感情は、必ずしも否定的感情のみに限定されない。次の例のように、話し手にとって望ましい事態が発生したことに対する「(予想外の)驚き」を表出することもある。

- a. 堪があたって無理と言われていた大学に合格してしまった。
b. 思わぬ大きな取引をまとめて課長に昇進してしまった。

(杉本 1991:121)

また、このような点において、「てしまう」は“mirativity”(意外性)の文法的マーカーであると考えられる。de Lancey (2001)によれば、mirativityは命題に対する話し手の心的態度の一種で、以下のように定義される概念である。

The term ‘mirativity’ refers to the linguistic marking of an utterance as conveying information which is new or unexpected to the speaker.

(de Lancey 2001:369-370)

(1a,b) の例では話し手自らの行いに対する「後悔」の念が表出されているのに対し、(1c) の例では他者（ここでは聞き手）の行いに対して「非難」を表出している。

このように「てしまう」によって表出される話し手の感情は、聞き手によってどのように解釈されるのだろうか。本稿では、「てしまう」による話し手の感情表出の解釈メカニズムに焦点を当てたい。発話を解釈する聞き手の立場に立てば、「てしまう」は、解釈過程において、いわば参照点としての役割を果たしていると考えられる。以下は、山梨（2004）の「参照点起動の推論モデル」を「てしまう」に当てはめたものである（田村（2020））。

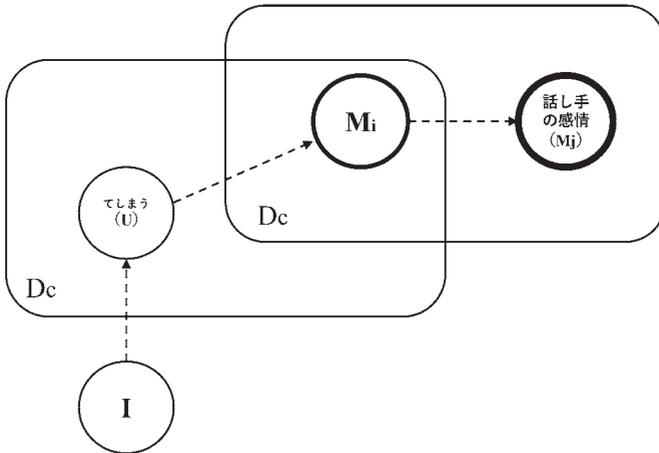


図1 「てしまう」の話し手の感情表出解釈モデル

多くの先行研究によって議論されてきたように、「てしまう」はアスペクトに関わる形式であり、必ずしも話し手の感情が表出されるわけではない（松下（1928）、金田一（1955）、吉田（1971）、守屋（1994）、西川（1996）、倉持（2000）、内山（2012）など）。以下のような例では、上述したような話し手の感情を読み取ることは難しい（田村（2015:282）より）。²

² 藤井（1992:21）は「主体の動作や変化や状態の実現あるいは終了を、しくじり、不都合として捉える話し手の評価、失望、困惑、感慨として捉える話し手の感情をあらわしている」と述べ、「てしまう」が基本的に話し手の感情表出を伴う形式であることを示唆している。

- (2) a. アイロン台と一緒に押し入れにしまってしまうと、僕の頭はいくぶんすっきりとしたようだった。

(村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』)

- b. どうやら受付を通らずに入ってきてしまった社外の人間だと誤解したらしい。

(三浦しをん『舟を編む』)

つまり、上図において、「てしまう」の解釈主体 (I) である聞き手は、常に話し手の感情 (Mj) に到達するわけではない。まず聞き手は、「てしまう」によって潜在的に規定される解釈ターゲットの候補ドメイン (Domain of Candidates) 内において、「てしまう」の意味 (ここではMi) を候補とし、そこに到達する。仮に、コミュニケーション上、到達した解釈が不十分である場合には、その「てしまう」の意味 (Mi) を更なる参照点として、話し手の感情表出 (Mj) である新たな解釈ターゲットに到達することになる。

本稿では、「てしまう」によって表出される話し手の感情を解釈するメカニズムについて、Sperber and Wilson (1986, 1995) の関連性理論の観点から説明を試みたい。特に、図1で示した「てしまう」の話し手の感情表出解釈モデルにおいて、「意味 (Mi)」を参照点として「話し手の感情 (Mj)」に到達する解釈過程を明らかにしたい。なお、「てしまう」は話し手の多くの否定的感情を表出しようが、本稿では、話し手の自己完結的な感情である「後悔」と、聞き手に向けられた感情である「非難」の二つのタイプの感情に限定し議論を行う。

2. 関連性理論と「てしまう」

2.1. 発話の解釈と関連性

Sperber and Wilson (1986, 1995) (以下、S&W) が提唱する関連性理論 (Relevance Theory) は、発話の解釈メカニズムを明らかにすることを目的として構築された理論である。本稿は「てしまう」に表出される話し手の感情を、聞き手がどのように解釈するのか、そのメカニズムを追求することであり、関連性理論を用いることは非常に有効な説明手段であると考えられる。以下、関連性理論について概観する。

そもそも「関連性」とは何だろうか。関連性は「処理努力 (processing effort)」と「認知効果 (cognitive effect)」によって決定される。処理努力とは、発話を

解釈する際に必要とされる情報処理上のコストである。解釈対象となる発話が言語的あるいは論理的複雑性を備えている場合や、解釈するために必要となる言語外的な知識や文脈の読み込みに必要とされる心的な労力である。一方、認知効果とは、聞き手が発話を解釈した際に生じる、自らの認知環境の修正を指す。私たちの認知環境は様々な想定 (assumption) の集合から構成されており、それぞれの想定が互いに論理的に結び付けられていたり、それぞれに確信度が付加されていたりするものだと考えられている。認知効果とは、このような認知環境が発話によって修正されることを指す。³ S&W は、処理労力と認知効果によって、関連性を以下のように定義している。

- (3) a. An assumption is relevant to an individual to the extent that the positive cognitive effects achieved when it is optimally processed are large.
- b. An assumption is relevant to an individual to the extent that effort required to achieve these positive cognitive effects is small.

(Sperber and Wilson 1995:265-266)

つまり、発話によって得られる想定が聞き手の認知環境を改善する程度が大きければ大きいほど、あるいは、解釈に必要な処理労力が小さければ小さいほど、その発話は関連性が高いということを意味している。

関連性理論では、以下の二つの原則の示されるように、聞き手は関連性を求めて、話し手の発話を解釈するのだと考えられている。

- (4) a. Cognitive principle of relevance
Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.
- b. Communicative principle of relevance
Every utterance creates a presumption of its own optimal relevance.

(Sperber and Wilson 1995:260)

(4a) の認知的関連性の原則を基盤として、(4b) の伝達的関連性の原則が成立している。簡単に言えば、聞き手は、話し手の発話には最適の関連性があると

³ S&Wによれば、認知環境の修正のパターンには、「文脈含意の付加」と「既存の想定強化」、「既存の想定削除」がある。詳細はSperber and Wilson (1986, 1995)を参照。

いう前提で解釈を行っているのである (presumption of optimal relevance)。具体的には聞き手は以下の2つの手順によって、発話から話し手の意図した想定を得ることになる。

- (5) a. Follow a path of least effort in computing cognitive effects: Test interpretive hypotheses (disambiguations, reference resolutions, enrichments, implicatures, etc.) in order of accessibility
 - b. Stop when your expectations of relevance are satisfied (or abandoned).
- (Wilson and Sperber 2004:613)

聞き手は認知効果を得るのに処理労力が最小限となるような道筋を辿って発話解釈を行い、自らが期待する関連性が得られた時点で発話解釈をやめるのである (あるいは期待する認知効果が得られない等の判断により解釈を打ち切ることもある)。関連性理論では、このような私たち人間の認知能力に根差した心的操作によって、聞き手の発話解釈メカニズムを説明づけているのである。

ここで一度「てしまう」に戻ろう。先に述べたように、「てしまう」は必ずしも話し手の感情を表出しない。あくまで「てしまう」の話し手の感情表出は、「てしまう」の意味を経由して得られるものだと考えられる(「てしまう」の意味性質については3節で検討する)。図1の話し手の感情表出解釈モデルに示されるように、解釈主体 (I) である聞き手は、「てしまう」を参照点としてその意味 (Mi) に到達する。この時点で聞き手が期待する認知効果が得られない場合には、その意味を更なる参照点として、関連性を求めて解釈処理を継続することになる。この発話解釈処理過程にどのような具体的な作業が含まれるのかについては4節で議論する。

2.2. 明意 (explicature)

2.2.1 基礎明意と高次明意

関連性理論では、発話から関連性の原則に従って引き出すことのできる解釈は大きく二つに区別されている。一つは、発話において話し手が意図した明示的な意味である明意 (explicature) である。そしてもう一つが、話し手が発話によって非明示的に伝達しようとした想定である暗意 (implicature) である。⁴

⁴ 表意 (explicature) と推意 (implicature) という訳語もある。

まずは明意から見ていこう。

明意は簡単に言えば、言語形式に記号化された意味を論理的に発展させた想定ということができる。この論理的な発展には、一義化 (disambiguation)、飽和 (saturation)、自由拡充 (free enrichment)、アドホック概念形成 (ad hoc concept construction) という推論作業がある。次の例を見てみよう。

- (6) a. 彼にはあまりおいしくない。
- b. 松田さんにはあまり好ましくない話だ。

(6a) が実際の発話であり、(6b) は発話から復元される明意だとしよう。(6b) の明意を得るために、発話の言語形式が要求する値を文脈によって補う「飽和」、複数の意味から意味を限定する「一義化」、関連性のある解釈を求めるために、言語要素に寄らず語用論的に要素を補う「自由拡充」が行われている。まず、発話内の「彼」が誰を指すのかを文脈から補うという指示付与の作業が飽和にあたる。二つ目に、「おいしい」という形容詞は「食べ物の味が良い」「都合がよい、好ましい」といった幾つかの意味をもつが、ここでは「一義化」によって後者の意味に限定している。また、適切な関連性を求めて、自由拡充によって「[[何が] おいしくない」のかを文脈から補っている。アドホック概念形成についてはここでは触れないが、聞き手はこのような推論作業によって、発話の言語形式を論理的に発展させ、明意が復元されることになる。⁵

聞き手は、このような推論作業によって得られる明意に加えて、それら明意を埋め込んだ命題態度や発話行為表現などの、より高次の形の明意を得る場合がある。前者の明意を基礎明意 (basic-level explicature) と呼ぶのに対して、後者を高次明意 (higher-level explicature) と呼ばれる。例えば、次のような場面では、聞き手は論理的発展によって復元される基礎明意 (= (7b)) のみならず、基礎明意に命題態度を補った高次明意も同時に復元していると考えられる。

⁵ アドホック概念形成は、明意解釈の際に、最適な関連性を求めて、記号化された語彙概念を緩め (lexical broadening) たり、狭め (lexical narrowing) たりする語用論的調整作業である。例えば、「太郎は男だ」(井門2017:112) という発話では、通常の「男」として解釈すると関連性は低いため、「決断力のある男」といった語用論的調整を行うことでより高い関連性が得られることになる(井門2020)。

(7) a. (嬉しそうに) 来てくれた!

- b. 山田さんがお見舞いに来てくれた。
- c. 山田さんがお見舞いに来てくれたと言っている。
- d. 山田さんがお見舞いに来てくれたことを信じている。
- e. 山田さんがお見舞いに来てくれたことが嬉しい。

(7a) の発話から、聞き手は (7b) の基礎明意のみならず、(7c-e) のような、発話行為表現や命題態度を補った高次明意をも復元している。ただし、実際には処理労力とそれに見合った認知効果を得られる (7e) のみが (7a) の発話の関連性に貢献する高次明意として採用されるのである。

2.2.2 高次明意と「てしまう」における感情表出

上述したように、聞き手は話し手の発話から命題態度や発話行為表現に基礎明意を埋め込んだ高次明意によって、話し手の心的態度を読み取ることができる。この高次明意によって、「てしまう」において表出される「後悔」のような話し手の感情を、聞き手がどのように解釈するのかの説明づけられるかもしれない。つまり、「てしまう」の解釈において、聞き手は次のような高次明意を復元している可能性がある。

(8) a. 彼に酷いことを言ってしまった。

- b. 佐藤君に酷いことを言ってしまった。
- c. 佐藤君に酷いことを言ってしまったことを後悔している。

(8a) のような発話において、聞き手は (8b) の基礎明意のみならず、その場の状況等に照らして、より認知効果の高い (8c) のような高次明意を得ることで、話し手の「後悔」の念を解釈していると考えられる。

ただし、「てしまう」は、後悔や無念さといった否定的感情表出に特化した形式である。聞き手が「基礎明意+後悔している (命題態度)」のような高次明意によって話し手の否定的感情を解釈しているにしても、「てしまう」の高次明意では、なぜ「後悔している」のような命題態度が補われることになるのだろうか。言語形式の中には、その意味が話し手の命題態度に制約を課し、解釈の方向を聞き手に指示することに特化した「手続き的意味」(procedural meaning)をもつものがあるという (Wilson and Sperber (1993), Blakemore (1987,

2000), 武内(2015)など)。例えば、談話標識やモダリティなどの言語形式は話し手の命題態度に制約を課し、それゆえに聞き手による高次明意の復元にも道筋を示すのである。また、倒置やイントネーションといった構造やパラ言語的要素も手続的意味をもつことがある(Wilson and Sperber (1993))。「てしまう」もこのような手続きの意味を有しているのではないだろうか。つまり、「てしまう」の使用は話し手の命題態度において、命題を否定的に捉えていることを表すという制約を課しており、それにより聞き手が(8c)のような否定的な命題態度を補った高次明意を復元するのではないだろうか。「てしまう」がそのような手続きの意味をもつ可能性については3節で検討する。

2.3 暗意 (implicature)

発話の言語形式に記号化された意味を論理的に発展させた想定である明意に対して、言語形式から論理的に発展させたものではない非明示的な意味は暗意(implicature)と呼ばれる。暗意は、聞き手の記憶や文脈などから語用論的推論によって引き出される想定である。この暗意には「暗意された前提(implicated premise)」と「暗意された帰結(implicated conclusion)」の二種類がある(Sperber and Wilson 1995)。次の会話をみてみよう。

(9) A: 静岡祭り行ったことある?

B: 人混みは苦手なんだ。

Aの立場からすれば、この話し手Bの発話は、一見自分の質問に答えていない。しかし、話し手Bのこの発話は最善の関連性が保証されていると信じ、少ない処理労力で関連性の高い解釈を目指して、以下のような演繹的推論を行うと考えられる。

(10) a. 話し手Aは人混みが苦手である。

b. 静岡祭りは混雑する。

c. 話し手Aは静岡祭りに行ったことがない。

ここで(10a)は発話の言語形式から論理的に復元される明意である。それだけでなく、聞き手であるAは、(10b)、(10c)のような推論によって引き出された非明示的な想定、すなわち暗意も得ることで関連性の高い解釈に到達して

いるのである。(10b) と (10c) とともに暗意であるが、(10b) は聞き手の記憶や百科事典的知識から得られるもので、関連性を達成するための前提となる想定であり、「暗意された前提」と呼ばれる。一方、(10c) は演繹推論の帰結として引き出される想定であり、「暗意された結論」と呼ばれる。このように、明意の復元のみでは関連性が達成されないような場合には、必要に応じて暗意された前提を引き出し、関連性を達成できる暗意された結論に到達するのである。⁶

2.2.2節において、「てしまう」によって表出される話し手の感情のうち、「後悔」のような感情の解釈は、「てしまう」の手續きの意味による高次明意の復元によって達成される可能性について述べた。一方、聞き手に向けられた「非難」のような感情の解釈はここで概観した暗意によって達成されるのだと考えられる。以降、この関連性理論の観点から、聞き手が「てしまう」の「後悔」と「非難」のような感情をどのように解釈しているのかを考察する。次節では、まず「てしまう」が手續きの意味をもつ可能性について議論する。

3. 「てしまう」の手續きの意味

3.1. 「てしまう」は手續きの意味をもつか

先にも述べたように、手續きの意味とは、武内 (2015:34) によれば、「話し手が手続きを記号化している語を使用するのは、発話解釈において、聞き手の推論の方向に際立ち (salience) を与え、推論の行き先である認知効果をポイントする」ことに特化した言語表現である (Blakemore (1987, 2000))。東森・吉村 (2003:85) で「このような情報が与えられることによって、聞き手がとるべき推論の方向が指示され、無駄な労力を使わず効率よく意図された効果を得る助けになる。」と述べられているように、聞き手にとっては発話解釈における処理労力を抑えられるため、関連性の高い発話として解釈することが可能となる。

そもそも、「てしまう」は手續きの意味を有しているのだろうか。武内 (2015) では、日本語においてこのような手續きの意味をもつ言語表現がかなり豊富にあることが示唆されている。例えば、武内 (2015) では「ぜんぜん」という副詞表現が手續きの意味をもつこと、また内田 (1998) では、文末表現の「のだ」

⁶ ただし、関連性を達成するための推論において、必ずしも明意が復元されてから暗意の算出を行うわけではない。関連性理論では、明意と暗意は相互調整 (mutual parallel adjustment) しながら同時進行的に処理される場合も多いと考えられる。詳しくは、Sperber and Wilson (1997) を参照。

が、事態に対しての何らかの話し手の関与を示し、その方向に聞き手の注意を向けるという手続き的意味をもっており、聞き手の高次表意の復元に貢献することが主張されている。更に、松尾（2013）では補助動詞「てくれる」が、話し手が事態を恩恵的と捉えている話し手の態度を聞き手に伝達し、例えば「話者が命題Pを得ることができて嬉しいと思っている」（松尾 2013:48）といった高次明意を聞き手に復元させる手続き的意味をもつことが論じられている。本稿の「てしまう」も補助動詞であるため、この松尾（2013）による補助動詞「てくれる」が手続き的意味をもつことは非常に興味深いと言える。

手続き的意味は、聞き手に対して話し手の命題態度に制約を課すことを指示する要素であり、これはつまり文の命題要素ではない、すなわち非真理条件的要素であることを意味する。⁷「てしまう」が真理条件的ではないことは、以下の条件節内への埋め込みテストによって判断することができる。埋め込まれた要素が条件節のスコープに収まれば、その要素は真理条件的であることになる（Recanati（1989）、武内（2015））。

- (11) a. もし私が寝てしまったら起こしてね。
- b. もし破れてしまったら、新しいのを買わないといけない。

「てしまう」の本来の意味については次の3.2節にて検討するため、ここでは仁田（2009:134）の「てしまう」の「動詞述語によって表される事態に、実現・解決、喪失・消滅といった意味を付け加える」という意味を一時的に採用しておく。例を見てみると、(11a)では帰結節の行為の条件となるのは「私が寝る」という条件であって、「てしまう」の意味を含んだ「私が寝るということが実現する」ではない。つまり、帰結節に対する条件節の命題の真理条件値に「てしまう」の意味は寄与しておらず、「もし私が寝たら」という条件節と真理条件値は変わらないのである。(11b)も同様に、条件節を「もし破れたら」としてもその命題は真理条件的には変わらない。このことは「てしまう」が条件節のスコープに収まらない、非真理条件的要素であることを意味している。

加えて、疑問文によるテストも確認しておこう。疑問文は命題について問う

⁷ 手続き的意味に対して「概念的意味」が用いられるが、この区別が必ずしも真理条件的・非真理条件的要素の区別と一致するわけではない。手続き的意味ではない概念的意味には命題要素として真理条件的となるものと高次明意の復元に貢献する非真理条件的なものがある。詳しくは東森・吉村（2003）、武内（2015）など参照。

ものであり、非真理条件的要素はその対象とならない。

(12) a. 全部片付けてしまったのですか？

b. 彼、帰っちゃったの？

これら二つの疑問文において、「てしまう」の実現のような意味は疑問の対象となっていない。つまり、その命題内容は「てしまう」を使わない場合（「全部片付けたのですか？」「彼、帰ったの？」）と変わらない。

以上のことから、少なくとも「てしまう」が命題要素、つまり真理条件的要素ではないことは明らかである。上述したように、この「てしまう」が手続き的意味をもち、聞き手の発話解釈において高次明意の復元に方向性を与えるものとしたら、それはどのような手続き的意味なのだろうか。次の3.2節では、「てしまう」の本来の意味を考察し、その手続き的意味を検討する。

3.2. 不可逆性と手続き的意味

「てしまう」が話し手の命題態度に制約を課し、解釈の方向を聞き手に指示することに特化した手続き的意味を持つのかを探っていこう。この手続き的意味は図1で示した「てしまう」の話し手の感情表出解釈モデルにおける意味Miにあたる。図1では、発話の聞き手がこの手続き的意味（Mi）を参照点として話し手の感情表出（Mj）に到達することが示されている。ただし、上述したように、また次節で議論するように、「後悔」のような話し手の感情と、「非難」のような感情では到達への道筋はやや異なっていると考えられる。

「てしまう」については、国語学あるいは日本語学の分野にて多くの先行研究があるが、その大半において、「てしまう」が事態の終結・完了や実現に焦点を当てるアスペクト的性質をもつことが指摘されている（松下（1928）、金田一（1955）、高橋（1969）、吉田（1971）、吉川（1979）、寺村（1984）、杉本（1991、1992）、守屋（1994）、西川（1996）、倉持（2000）、内山（2012）など）。杉本（1992）の例をみてみよう。

(13) a. 太郎は その本を 全部 読んでしまった。 （完結相）

b. 私は 緊張のあまり 汗を かいてしまった。 （実現相）

（杉本 1992:61）

(13a) は「本を読む」ことが最後まで終わってしまったことを表す完結相の用法、(13b) は「汗をかく」という事態の発生を表すという実現相の用法である。⁸ これらの違いは事態の有界性 (boundedness) の性質の違いから生じるものだと考えられる。有界表現では、事態が開始点あるいは終結点という変化点をもつが、(13a) の「全部本を読む」のように事態が終結点をもつ場合には完結として、(13b) の「汗をかく」のように開始点のみをもつ場合には実現として解釈される。

完結と実現というアスペクト的意味の呼び方の違いはあるが、「てしまう」は開始点あるいは終結点のいずれかの変化点を超えるという中核的な意味性質をもつと言える (金水 (2000))。従って、以下のように、事態が状態を表している、すなわち変化点を含まない場合には「てしまう」の使用は容認されない (鈴木 (1998), 梁井 (2009) など)。

(14) a. *彼の自転車は体育館の裏にあった。

b. *たくさんのお金が要ってしまう。

(鈴木 1998:51)

つまり、「てしまう」は事態の開始点、あるいは終結点を超えるという変化を表す形式である。ただし、「てしまう」自体が事態のアスペクト性を担っているわけではない。以下のように、(13) の例から「てしまう」を除いても、事態のアスペクト性に関してそれほど変わらないように見える。

(15) a. 太郎はその本を全部読んだ。

b. 私は緊張のあまり汗をかいた。

(15a) の場合、副詞「全部」によって終結点が与えられ、完了の「た(だ)」によって終結点への到達が表されている。一方、(15b) では完了の「た」によって「汗をかく」という瞬間的動作の開始点への到達が表されている。つまり、「てしまう」を使わなくても上述のような変化は表されていると言える。

それでは「てしまう」は事態のアスペクト性にどのように貢献しているので

⁸ 「てしまう」のアスペクト的意味を、金田一 (1955) は「終結態 (ある動作・作用が完全に行われること)」と「既現態 (その動作・作用がかりそめではなく本当に行われる)」、寺村 (1985) は「完了」としている。

あろうか。それは完了の「た」では表すことのできない、変化が生じたこと、そしてその結果状態へ強い焦点を当てることであると考えられる。言うならば、完了の「た」が変化点への「到達」である一方、「てしまう」は変化点を「超えること」の違いである。すなわち後者は、変化点の超えた先である結果状態にも重きを置いているのである。⁹ゆえに、「てしまう」によって表された事態はキャンセルができない（田村（2015a, 2015b)）。以下を比べてみよう。

(16) a. その湿った丸太は、燃やしても燃えなかった。

b. 寒かったので、エンジンを掛けても掛からなかった。

（影山 1996:288）

(17) a. *その湿った丸太は、燃やしてしまっても燃えなかった。

b. *寒かったので、エンジンを掛けてしまっても掛からなかった。

（田村 2015a:289-290）

影山（1996）で提示されている（16）のキャンセル文は問題なく容認される一方、「てしまう」を用いた（17）は容認されない。それは「てしまう」による、事態の変化点を超えたことと結果状態への強い焦点化の性質が原因なのではないかと考えられる。

以上のことから、「てしまう」の中核的意味は以下のようなスキーマとして表示できる。

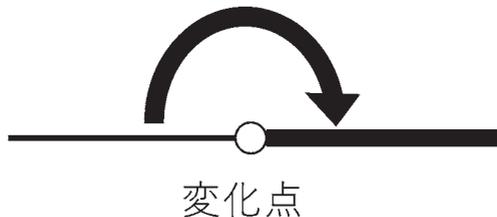


図2 「てしまう」の中核的意味のスキーマ

「てしまう」は事態の開始点あるいは終結点を超えること、そしてその結果状態に焦点を当てる形式であると言える。

⁹ これは「てしまう」を事態の限界の達成を表す形式だと論じている金水（2000）と共通する部分も多い。金水は、事態の限界を、動作あるいは変化の開始点・終了点としている。

着目すべき「てしまう」の意味性質はこれだけではない。仁田（2009）では「てしまう」に無意志的な実現を表す用法があることが指摘されている。また、杉本（1991）においても同様に、「てしまう」には無意志化の性質があることが論じられている。以下の例を見てみよう。

- (18) a. あんまりおいしいので、ラーメンを3杯も食べてしまった。
b. 電車が揺れたはずみに、うっかり隣の乗客の足を踏んでしまった。
(仁田 2009:136)

仁田（2009:125-136）によれば、無意志化とは「本来、動作の主体の意志によってコントロールされる動作が、その意志によることなく実現すること」を表すのだという。(18)のいずれの例においても、話し手自身による行為であるが、「てしまう」によって表されているのは、話し手の意志ではなくそれらの行為がなされてしまったと解釈される（一方、「あんまりおいしいので、ラーメンを3杯食べた」の場合には、話し手の意志が感じられる）。(18b)では、無意志的動作であることを表す副詞的表現「うっかり」がなくても無意志的に解釈されるであろう。このように動作主体が話し手自身である場合にも、「てしまう」はその行為を無意志的なものとして表現する性質を持っている。¹⁰

また、興味深いのは、仁田（2009）が、この「てしまう」の無意志化の用法において話し手による感情の表出が読み取れることを示唆している点である。¹¹ 事実、以下のように、話し手が動作主体であるにもかかわらず、無意志化されている用法からは話し手の「後悔」のような念が読み取れる。

- (19) a. あの時、僕はなんであんなことをしてしまったのか。
b. 夜中にチョコレートをこんなに食べてしまった。

¹⁰ 「てしまう」の無意志化の性質は全ての用法に当てはまるわけではない。例えば以下のような例では動作主体である話し手の意志によって行為が完遂していることが表されている。

- a. おかずが残っていたので、食べてしまった。
b. 読んでいなかった本を、日曜日にまとめて読んでしまった。

仁田（2009:133-134）

仁田（2009）ではこれらには話し手の意志があると解釈されるのかを説明していないが、(a)であれば理由節、(b)であれば「まとめて」といった表現により、話し手の動作の意志性が保たれるのだと考えられる。

¹¹ 仁田（2009）は「情意的な意味を帯びることがある」と述べている。

これらの例では、話し手自身が動作主体であり、「する」や「食べる」といった動作主体の意志によって制御可能な動詞であるにも関わらず、「てしまう」と共起するとその意志性が失われてしまう。これらの例では、話し手がすべきではなかったと後悔していると解釈できる。ただし、「てしまう」の無意志化のすべての用法から話し手の感情を読み取れるわけではなく、文脈が必要となる。どのような文脈的条件下で聞き手が「後悔」のような感情を復元するのは次節で議論する。

以上のように、「てしまう」は記述される事態が変化点を越えること（すなわち、事態の開始あるいは終結を表す）、そしてその結果状態に焦点を当てる。更に、「てしまう」には無意志化の性質があり、話し手自身が動作主体であっても、行為が無意志的に遂行されてしまったことを表す形式である。このような変化と結果状態の強い焦点化、無意志性から、「てしまう」では事態が不可逆性をもつと解釈される。話し手の立場から言えば、「てしまう」は事態を不可逆的なものとして表出する主観的表現であり、これはすなわち、自らの意志とは無関係に発生し、制御できない事態であり、取り返しのつかないものとして話し手が捉えていることを含意するのである。この点において、「てしまう」は、事態すなわち命題への話し手の捉え方を強く含んだ形式であると言える。

このような「てしまう」による不可逆性は、聞き手の発話解釈に強く影響を及ぼすと考えられる。金水（2004:32）では、「てしまう」について「もはや取り返しの付かない憂うべき事態であるという方向へ解釈されることになる」と述べており、この形式が手続き的意味をもつ可能性を示唆している。それでは具体的に「てしまう」はどのような手続き的意味を持つのだろうか。聞き手の立場から見れば、「てしまう」の発話解釈において、伝達された事態（命題）を話し手が不可逆的なものとして認識しているという情報も得ているのである。「てしまう」の手続き的意味について以下のようにまとめることができる。

- (20) 「てしまう」は「発話によって伝達される事態（命題）を話し手が不可逆的だと捉えていることを、伝達意図として認識しなさい」という情報をコード化している

聞き手は「てしまう」のこのような手続き的意味により、話し手の「後悔」や「非難」といった感情の解釈が可能になる。次節で論じるように、話し手の「後悔」の解釈は、この手続き的意味から直接的に高次明意を復元することにより

達成される一方、「非難」という聞き手に向けられたな感情の解釈は暗意によって達成されると考えられる。

4. 「てしまう」における話し手の感情をどのように解釈するのか

4.1. 「てしまう」の話し手の感情表出解釈モデル

本稿の目的は、「てしまう」によって表出される話し手の感情の解釈メカニズムを明らかにすることである。冒頭で示した参照点起動の推論モデルを応用した「てしまう」の解釈過程は今や以下のように修正が可能である。

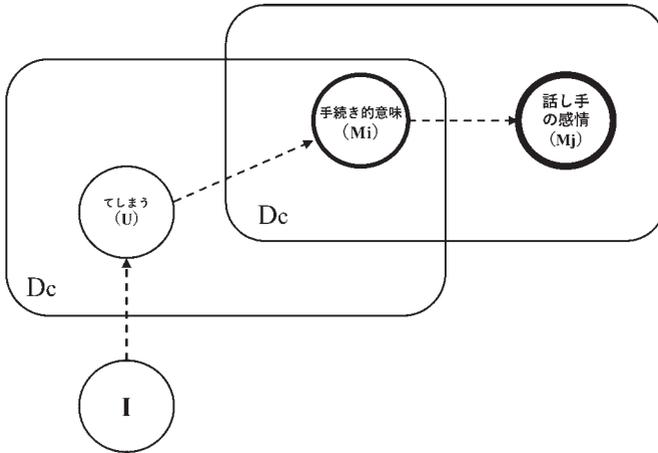


図3 「てしまう」の話し手の感情表出解釈モデル（修正版）

「てしまう」の聞き手、すなわち解釈主体（I）は、直接的に話し手の感情（M_j）に到達するのではなく、前節で論じた手続き的意味（M_i）を参照点として到達する。残された課題は、聞き手が（20）で示された「てしまう」の手続的意味から、どのように話し手の感情表出を解釈するのかを明らかにすることだけである。先にも述べたように、「てしまう」によって表出される「後悔」と「非難」という感情を、聞き手はそれぞれ異なる解釈過程を経ると考えられる。つまり、上図の手続き的意味（M_i）から話し手の感情（M_j）への道筋には二通りあるということを意味している。以下、「後悔」と「非難」それぞれの解釈過程を考察していく。

4.2. 高次明意としての「後悔」

関連性理論において、手続的意味は、聞き手による発話解釈過程において、明意の復元あるいは暗意の推論処理に制約を課すものである。この手続的意味が与えられると、聞き手は処理労力の少ない、効率のよい処理によって発話の関連性を達成することが可能となるのである。Blakemore (1987) とその一連の研究 (Blakemore 1988a, 1988b, 2000 など) では、暗意の推論処理に制約を与える手続的意味をもつ言語形式 (例えば、so や nevertheless など) の存在が示されてきたが、Wilson and Sperber (1993, 2000) では聞き手の高次明意の復元処理に制約を与える言語形式 (例えば、倒置や let's、談話標識 huh など) の存在が示された。日本語でも高次明意の復元に寄与する手続的意味について論じた先行研究は少なくない。例えば、内田 (1998) による「(の) だ」、Matsui (2000) による「か」や「よ」などの文末助詞、松尾 (2013) 補助動詞「てくれる」、武内 (2015) による条件接続表現「なら」、楊 (2017) による談話標識「なんか」、などが挙げられる。本稿でも、これらの言語形式同様に、「てしまう」の手続的意味は高次明意の復元に制限を与えるものだと主張する。

「てしまう」はどのような高次明意を復元し、適切な高次明意を選択しているのだろうか。以下の発話を考えてみよう。

(21) 成績表を失くしてしまった。

聞き手はこの発話を論理的に発展させることにより、以下のような基礎明意あるいは高次明意を復元すると考えられる。

- (22) a. 基礎明意：話し手は成績表を失くしてしまった。
b. 高次明意：話し手は成績表を失くしてしまったと言っている。
c. 高次明意：話し手は成績表を失くしてしまったと信じている。
d. 高次明意：話し手は成績表を失くしてしまったことを残念に思っている。
e. 高次明意：話し手は成績表を失くしてしまったことを後悔している。

聞き手はこれらの基礎明意、高次明意全てを復元するのではなく、文脈等に照らし合わせて、最も適切な関連性を達成できる明意を復元することになる。例えば、聞き手は、話し手が教員であり、成績表には多くの学生の成績が記入さ

れていたということを知っていたとする。このような文脈では、聞き手は (22a) のような基礎明意の復元だけでは適切な関連性を達成できないであろう。従って、より適切な関連性を求めて発話解釈を行うことになるが、この際に、(20) でみた「てしまう」の「発話によって伝達される事態 (命題) を話し手が不可逆的だと捉えていることを、伝達意図として認識しなさい」という手続き的意味により、処理労力の少なく、適切な関連性を達成する道筋が与えられる。つまり、上述したような文脈では、「てしまう」の手続き的意味の制約によって、(22e) のような命題態度を高次明意として復元することで適切な関連性を達成することができる。

(20) の手続き的意味によって、聞き手が (22e) のような命題態度を高次明意として復元することになるのかについて詳細に考えてみたい。「てしまう」の手続き的意味によって、聞き手は「事態 (命題) を話し手が不可逆的だと捉えていること」を情報として得ることになるが、そこからなぜ「その命題を後悔している」という話し手の命題態度を高次明意として復元できるのだろうか。ここには人間の感情の慣習性が関与していると考えられる。Fiehler (2002) によれば、人間の感情は慣習的なものであり、人間がどのような状況においてどのような種類の感情を抱くことになるのかは、社会的あるいは文化的に予測が可能だという。Fiehler (2002) ではこれを以下のように示している。

- (23) If a situation is interpreted as type X,
it is appropriate and is socially expected,
to have an emotional experience of the type Y.

(Fiehler 2002:83)

私たちは日常生活の中における様々な経験の積み重ねにより、ある特定の事態とそれに誘発されうる人間の感情のタイプの結びつきをスキーマ的知識として蓄積しているのではないだろうか。そのような自らの経験に裏付けられたスキーマ的知識により、他者の感情を推し量ることが可能になると考えられる。次の例では、発話者が、状況から他者の感情を推し量っていることが分かる (田村 (2020) からの引用、下線部は筆者による)。

- (24) Somehow you borrow money from the bank or your money-market fund,
and now the car is front of your house. You are happy, aren't you? You

must be happy.

(Papaji H.W.L. Poonja, Wake Up and Roar)

ここでは、下線部前の聞き手の現状（お金を借りて、家の前に車が停まっている、つまり車を購入したという状況）から、下線部のように聞き手の（この状況における）感情を推し量っているのである。

(21)の「てしまう」における高次明意の復元にも、この感情の慣習性が関与するのだと考えられる。「てしまう」の発話処理において、聞き手は「事態（命題）を話し手が不可逆的だと捉えている」という手続き的意味に加えて、例えば、教師が学生の成績を紛失したら大問題になる、話し手は不利益を被ることになる、等の経験や予測、百科事典的知識などの文脈を読み込んで発話処理を行う。この場合、聞き手は人間の感情の慣習性に基づいて、話し手がその事態に対して否定的な感情である抱くと推測する。更に、「てしまう」の事態が話し手自身の行為（紛失）によって引き起こされたものであるため、「後悔」のような感情を抱くのが当然だと結論づけ、(22e)のような命題態度を高次明意として復元しているのではないだろうか。関連性の達成という観点から言えば、聞き手の発話処理において、そのような文脈の中で「てしまう」の手続き的意味による制約に従うことが、最も適切な関連性を達成できる道筋なのである。

4.3. 暗意としての「非難」

次は「てしまう」における話し手の「非難」の表出について検討したい。非難という感情表出は、他者が引き起こした事態によって話し手自らが何らかの不利益を被る際に表出される、他者への苛立ちを示したり、他者を咎めるといった言語行為である。このような話し手の感情表出を聞き手はどのように解釈するのだろうか。4.2節で論じたように、「後悔」のような、いわば自己完結的な感情は命題態度として高次明意によって復元されるが、「非難」のような場合には、少し複雑な発話解釈過程を経ることになると考えられる。

話し手による「非難」の表出を聞き手がどのように解釈するのか、以下の例を用いて考えていこう。

(25) (Aは冷蔵庫に入れておいた自分のプリンをBが食べているのを見て)

A: 冷蔵庫のプリン食べちゃったの？

話し手であるAは、この疑問文形式の発話によって確認行為を行なっているわけではなく、聞き手Bが自分のプリンを食べてしまったことを非難しているのである。聞き手Bはこの発話からAが自分を非難していることを解釈することになるが、その解釈への到達には以下のような発話解釈処理が行われていると考えられる。

- (26) a. 基礎明意：話し手は聞き手が冷蔵庫に入れてあったプリンを食べってしまったかを尋ねている
- b. 高次明意：話し手は聞き手が冷蔵庫に入れてあったプリンを食べってしまったことを残念に思っている
- c. 暗意された前提1：人は確信していること・明らかに分かっていることについては（確認行為等でない限り）通常は尋ねないだろう
- d. 暗意された前提2：話し手にとって冷蔵庫に入れてあったプリンを聞き手が食べたことを確信している
- e. 暗意された前提3：話し手は聞き手に命題の確認を行なっているのではない
- f. 暗意された結論：話し手は冷蔵庫に入れてあったプリンを聞き手が食べたことについて尋ねているのではなく、その行為を非難している

聞き手はAの「てしまう」を用いた発話から論理的に発展させ、(26a)のような基礎明意を復元する。あわせて、「てしまう」の手續きの意味から話し手の命題（冷蔵庫に入れてあったプリンを聞き手が食べたこと）への態度を高次明意として復元する。この際に、聞き手は、例えば、声のトーンや、話し手がそのプリンを食べるのを楽しみにしているのを知っている等の文脈を参考に高次明意を限定する。しかし、この高次明意の復元だけでは最適な関連性を達成したとは言えない。なぜなら、Aの発話は問いかけの形式であるため、その発話は話し手Aの「残念」のような自己完結的な感情の表出のみではなく、何らかの形で聞き手をも巻き込んでいると考えられる。そのため、(26b)の高次明意の復元では、Aの発話から十分な認知効果が得られたとは結論付けられないのである。従って、より適切な関連性を求めて、背後にある非明示的意味、すなわち暗意を推論する。

2.3節で述べたように、暗意は、聞き手の記憶や経験、文脈などから語用論的推論によって引き出される想定である。(25)の発話においては、聞き手は自らの知識、経験から(26c)のような人間のコミュニケーションにおける行動原理を呼び起こす。また、自分(聞き手)がプリンを食べているところを話し手に目撃されたことを知っている場合、(26d)のような想定を推論の前提として用いる。これに付随して、Aの発話の目的に関する想定として(26e)を呼び起こす。このような暗意された前提をもとに演繹推論を行い、関連性を達成できる(26f)の暗意に到達、すなわち、話し手の「非難」という感情を解釈できるのだと考えられる。

5. おわりに

本稿では、関連性理論の観点から、「てしまう」によって表出される「後悔」と「非難」といった話し手の感情に焦点を当て、その聞き手の発話解釈メカニズムを検討した。3節で論じたように、「てしまう」は、話し手の命題態度に制約を課し、聞き手の発話解釈に道筋を与える手続きの意味を有していると考えられる。この手続きの意味は、図1(あるいは図3)で示した「てしまう」の話し手の感情表出解釈モデルにおいて、ターゲットとなるMjの参照点Miとして機能する。ただし、適切な関連性を達成できる場合には、解釈主体(I)である聞き手はMiで解釈処理を終える場合もある(この場合には、(2)に例示したような話し手の感情表出を伴わない「てしまう」の用法となる)。話し手の感情が表出されている場合、本稿で議論したように「後悔」のような自己完結的な感情と、「非難」のような他者(聞き手)へ向けられた感情については、聞き手は手続きの意味から、高次明意の復元と暗意の推論という異なる発話処理過程を辿り、それぞれのターゲットに到達することになる。

これまで言語表現によって表出される話し手の感情は、多くの場合、文脈に依存した、純粋に語用論的な産物として扱われ、その表出と解釈メカニズムに焦点が当てられることはほとんど無かった。今後、言語表現と話し手の感情表出の繋がりについて、本稿で示したような関連性理論の立場からの分析を進めることで、より詳細なメカニズムを明らかにできると思われる。

参考文献

- Blakemore, Diane (1987) *Semantic Constraints on Relevance*, Blackwell, Oxford.
- Blakemore, Diane (1988a) "The Organization of Discourse," *Linguistics: The Cambridge Survey*, Vol.4, (ed.) Frederick J. Newmeyer, 229-250, Cambridge University Press, Cambridge.
- Blakemore, Diane(1988b)"So as a Constraint on Relevance," *Mental Representation: The Interface between Language and Reality*, (ed.) Ruth Kempson, 183-195, Cambridge University Press, Cambridge.
- Blakemore, Diane (2000) "Indicators and Procedures: Nevertheless and But," *Journal of Linguistics* 36:3, 463-486.
- De Lancey, Scott (2001) "The mirative and evidentiality," *Journal of Pragmatics* 33, 369-382.
- Fiehler, Reinhard (2002) "How to Do Emotions With Words: Emotionality in Conversation," *The Verbal Communication of Emotions*, (ed.) S. R. Fussell, 79-106, Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah.
- 藤井由美 (1992)「[してしまう]の意味」『ことばの科学5』17-40, むぎ書房, 東京.
- 東森勲・吉村あき子 (2003)『関連性理論の新展開 認知とコミュニケーション』研究社, 東京.
- 井門亮 (2017)「多義語の分析と語用論」『語はなぜ多義になるのか：コンテキストの作用を考える』中野弘三(編), 106-127, 朝倉書店, 東京.
- 井門亮 (2020)「関連性理論」『はじめての語用論 基礎から応用まで』加藤重広・澤田淳(編), 109-124, 研究社, 東京.
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論－言語と認知の接点－』くろしお出版, 東京.
- 金田一春彦 (1955)「日本語動詞のテンスとアスペクト」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』(1976)所収, 27-62, むぎ書房, 東京.
- 金水敏 (2000)「時の表現」『時・否定と取り立て』3-92, 岩波書店, 東京.
- 金水敏 (2004)「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」影山太郎・岸本秀樹編『日本語の分析と言語類型 柴谷方良教授還暦記念論文集』47-56, くろしお出版, 東京.
- 倉持保男 (2000)「補助動詞「(～テ)シマウ」について」山田進・菊池康人・初山洋介編『日本語 意味と文法の風景－国広哲弥教授古稀記念論文集』

289-300, ひつじ書房, 東京.

- Matsui, Tomoko (2000) "Linguistic encoding of the guarantee of relevance: Japanese sentence-final particle YO," (eds.) Andersen, G. and T. Fretheim, *Pragmatic Markers and Propositional Attitude*, John Benjamins, Amsterdam.
- 松尾貴哲 (2013)「命題態度への意味論的制約: 日本語補助動詞「テクレル」の場合」『人文研究』179号, 神奈川大学人文学会, 13-53.
- 松下大三郎 (1928)『標準日本語文法』勉誠社, 東京.
- 守屋 三千代 (1994)「「シテシマウ」の記述に関する一考察」早稲田大学日本語研究教育センター紀要, 49-70.
- 西川真理子 (1996)「「てしまう」の本来的機能」『奥田博之教授退官記念論集 言語と文化の諸相』75-88, 英宝社, 東京.
- 仁田義雄 (2007)『現代日本語文法3』日本語記述文法研究会(編), くろしお出版, 東京.
- Recanatti, François (1989) "Referential /attributive: A contextualist proposal," *Philosophical Studies* 56, 217-249.
- 杉本武 (1991)「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ (1)」九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学篇) 第4号, 109-126.
- 杉本武 (1992)「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ (2)」九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学篇) 第5号, 61-73.
- 鈴木智美 (1998)「「てしまう」の意味」日本語教育 97号, 48-59.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986/1995) *Relevance: Communication and cognition*, Blackwell, Oxford.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1997) "The mapping between the mental and the public lexicon," *UCL Working Papers in Linguistics* 9, 107-125.
- 高橋太郎 (1969)「すがたともくろみ」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』(1976)所収, 117-153, むぎ書房, 東京.
- 武内道子 (2015)『手続きの意味論 談話連結詞の意味論と語用論』ひつじ書房, 東京.
- 田村敏広 (2015a)「補助動詞「てしまう」における「不可逆性」の意味基盤」『言語研究の視座』深田智・西田光一・田村敏広(編), 280-291, 開拓社, 東京.
- 田村敏広 (2015b)「補助動詞「(て)しまう」と感嘆詞「しまった」の意味分析と拡張メカニズムの考察」『認知言語学論考 12』山梨正明(編), 337-378,

ひつじ書房, 東京.

田村敏広 (2020)「話者の感情表出について – Get受動文と「てしまう」を例に –」
『認知言語学研究 第5巻』, 69-86.

寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版, 東京.

内田聖二 (1998)「「(の)だ」 – 関連性理論からの視点 –」『小西友七先生傘寿
記念論文集 現代英語の語法と文法』243-251, 大修館書店, 東京.

内山潤 (2012)「補助動詞「テシマウ」のアスペクトについて」金城学院大学論
集 人文科学編 8 (2) , 1-11.

Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1993) “Linguistic form and relevance,” *Lingua*
90, 1-25. Reprinted in Wilson, D. and D. Sperber, 2012, 149-168.

Wilson, Deirdre and Dan Sperber (2004) “Relevance Theory,” *Handbook of
pragmatics*, (ed.) G. Ward and L. Horn, 607-632, Blackwell, Oxford.

楊淇 (2017)「手続き的意味による日本語談話標識「なんか」の分析」『国際広
報メディア・観光ジャーナル』24号, 北海道大学大学院国際広報メディア・
観光学院, 57-74.

梁井久江 (2009)「テシマウ相当形式の意味機能拡張」日本語の研究 第5巻1号,
25-29.

吉田金彦 (1971)『現代日本語助動詞の指摘研究』明治書院, 東京.

吉川武時 (1973)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペ
クト』金田一春彦 (編) , むぎ書房 (1976) 所収, 155-328.